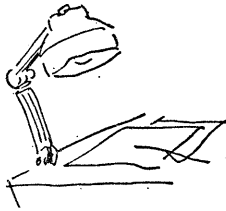


わたくしの

シルクロード ⑦



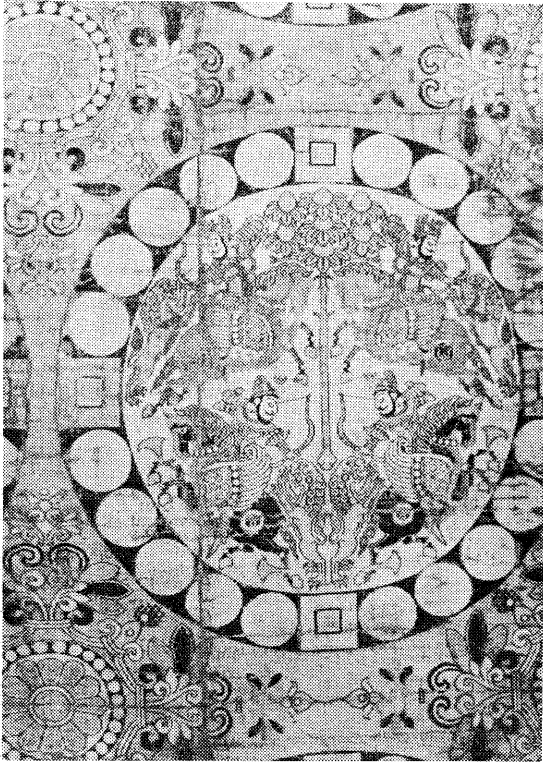
横張和子

シノ・イラニカ錦

明治十七年の夏、E・F・フェノロサ教授が奈良に法隆寺を訪ね、その夢殿を開扉したとき、厨子内に安置されていた観世音菩薩（救世観音）の傍に一まきの織物がたてかけられていました。

それを巻きもどすと、日本人にはまことに異様に映る図様の、しかし精緻麗妙な錦が全貌をあらわしました。これが今日国宝となっている四騎獅子狩文錦です。（図版①）古くは四天王文錦と呼ばれ、聖徳太子の守屋討伐の際の旗と伝えられています。

薄茶色の地に直径四一三センチの大きな円文を三つずつ五段に並べた丈二五〇センチ、幅一三四・五センチの雄大な錦です。図柄についてやや詳しく述べますと、円文の周囲に地を藍色にし、四方に重角文をおいて、その間に五つずつの白の珠文を連らねた円帯がめぐり、中に花果をつけた立樹一株を中心に、その左右に天馬にまたがる有髯の武人がまさに襲いかからんとする獅子に向って弓をひきしほっている情景が上下二段に向きを変えておかれています。武人の服装が天部の像にあらわれている一種の甲冑となっていてるところから四天王文錦の名が出たのでしよう。（図版②）円文が間隔をあけて並ぶところにてきる菱形の間地には開花



◀ 図版① 法隆寺蔵 四騎獅子狩文錦

した蓮華文を内に、細い連珠の円文がめぐり、その四方に忍冬花文のび出ている副文で填められています。永年にわたって朽損したり、褪色によって表面の糸の剝落がひどく、色も鮮明を欠くところが生じてはいますが、地の色はもと赤でした。円帯の珠文は淡紅色、円文の上段の馬および獅子は緑、下段のそれは藍であ



◀ 図版② 四騎獅子狩文錦武人像

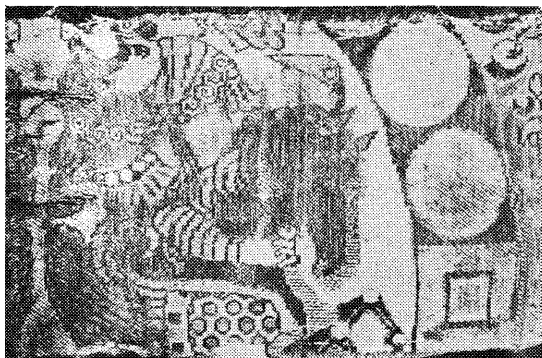
らわされ、武人の甲冑は赤、馬面と胸前は藍と白の糸とを一越交替に入れて斜線でしめし、ほかに縹はな赤色などが使われています。織り方は復杯三枚綾緯錦です。  
この日本の文様とはいい難い図柄に早く注目して、明治二十一年「法隆寺紋錦旗考」なる論文を出されたのが、歴史学者の三宅

米吉博士でした。そしてこの錦の文様の構成をアッシリア系統とみました。紀元前七世紀のクニンジクの宮殿遺址からアシュル・バーン・アブリの狩獵浮彫(大英博物館)はどれも名品ぞろいですが、中でも「獅子狩」の名声はとくに高く、その逼真の写実はたしかに嘆賞に値いするもので、古代美術における最もすぐれた動物表現の一つとされています。しかし博士は後になって、この文様の起源はササン朝ペルシアの系統に属するものといわれ、旧説を撤回されました。大正四年、奥田誠一氏が「東洋の古代織物における波斯模様(ペルシア)に就て」と題する論文で、「明らかにビザンツ化された波斯式の更に支那化を受けたもの」との解釈を出されました。騎士の相貌が胡人(西方人)の様であること、胡弓をひいて獅子狩をしていること、冠に翼と日月の宝飾があること、天馬にのる神格をもつ人物であることから、これはササン王朝のホスロ一二世(在位五九〇—六二八)、あるいはその子孫の帝王の狩猟を描く錦と考えられました。

しかし馬の臀部に漢字と読める印がみえ、上のもものでは「山」、下のもものでは「吉」と読まれることによつて、これがペルシアの産ではなくて、中国の産ということ、今日一致した見解となっています。古代裂の研究家の龍村謙氏はこの錦が日本に渡来した時期にもふれて、この錦は中国隋代の作品であると考定されたの

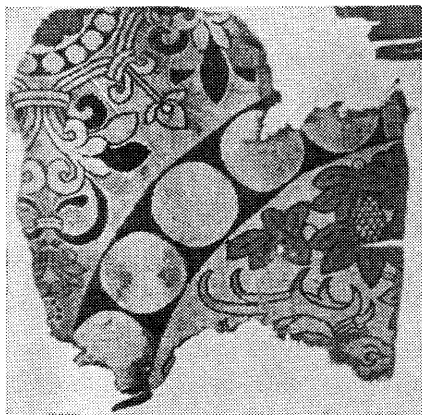
です。龍村氏は人物の冠にホスロ一二世と断定する積極的な理由をみとめ、ホスロ一二世がアレクサンドリアの織物技術を六一六年にクチシフォンに移入する以前ササン朝では織錦を中国に注文していたと仮定し、六一六年以前にこのようなホスロ一二世の肖像入りの広巾の錦が織られたのは隋の煬帝(五八〇—六一八)の時代であり、これが法隆寺と関係の深い聖徳太子が遣唐使を派遣した六〇七年から六〇九年の間に日本にもたらされたとみればこの錦はこの年代をくだることなく隋朝で製作されたに違いないとす

るのです。中国の錦は古くは経錦というもので、それについては、このシリーズですでに何度かお話して来ましたが、それはやがて緯錦に変わっていきます。経錦は経糸で模様をあらわし、緯錦は緯糸で模様をあらわすもので、その組織図は十号でご紹介してあります。そして緯錦の意匠にはペルシア的なモチーフが多いことに基いて、中国隋唐の源流をペルシアに求める説があつて、わたくしもまたこれに参加しているいろいろ考えているものだとも書きました。しかし龍村氏によると、すでに隋代に、中国で緯錦を十分に完成させていたことになり、他方六一六年より前のササン朝ペルシアには緯錦を織り出す技術がまだなかったこととなります。つまり緯錦の技法の中国成立説と、ペルシア成立説の二様あることにな



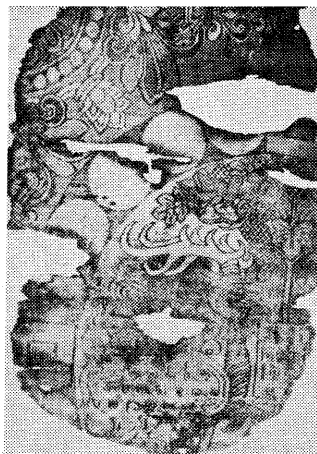
◀ 図版③

連珠天馬騎士文錦  
アスタナ 337 号墓  
顕慶 2 年 (657 年) の墓  
誌伴出



◀ 図版④

アスタナ出土の花樹対鹿錦



図版⑤▶

大谷探検隊将来の花樹  
対鹿文錦

▲ 図版⑥

クチャ出土の舍利容器蓋の模様の一部

(東京国立博物館)



ります。今日なおいずれとも確定し難く、なお仮説の段階におかれています。他方、考古学的な発掘からこの種の錦の類例が多数、西域のトルファン、アスタナの古墓群から、発見されました。(図版③～⑤)今これらを整理して、系統づける必要が迫られてきています。それらの錦の特徴の主なもの、藍地に重角文と連珠文(図版⑥)を配した円環と副文の唐草のスタイルがどれも類似しているということです。そしてその円文の中の図様はさまざまだが、かなり濃厚に、ベルシャ的であるということです。そこで、京都の古代織物研究家である太田英蔵氏は、これらをシノ・イラニカ *Sino-Iranica* 錦と名づけられたのです。この種類の錦は多くが西域の古址からの出土品ですが、わが正倉院の染織品の中にも唯一例ですが伝世されています。犀円文錦といわれるものです。多くの断片になっていて、正倉院の古裂帳に分散して貼りつけられています。先日それを拝見してきましたが、その描き起し図があるので、ここにご覧に入れます。その華麗な副文が美事です。(図版⑦)このような一連のシノ・イラニカ錦については次回からお話を進めて行きたいと思えます。

(山脇女子短期大学)

▼図版⑦ 犀円文錦の復原図（約0.36の1）

